

教育学研究科教員業績一覧

(2015年4月1日から2016年3月31日)

基礎教育学コース

小玉重夫(教授)

〈著書〉

『カリキュラム・イノベーション』(編者代表・小玉重夫, 執筆者佐藤学, 本田由紀, 市川伸一, 秋田喜代美, 藤村宣之, 根本彰, 植阪友理, 田中智志, 金森修, 下山晴彦, 高橋美保, 川本隆史, 牧野篤, 白石さや, 星加良司, 大桃敏行, 福島昌子, 檜府暢子, 村石幸正, 今井康雄, 南風原朝和) 東京大学出版会, 2015年10月, 全361頁

〈雑誌論文〉

小玉重夫(単著)「日本における政治教育・市民教育の現状と課題」政治思想学会『政治思想研究』第15号, 2015年5月, pp.81-96, 風行社

小玉重夫(単著)「高校での『政治教育』を考える」『月刊高校教育』第48巻第9号, 学事出版, 2015年8月, pp.26-29

小玉重夫(単著)「海洋教育の意義と課題—シティズンシップ教育の観点から—」東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター編『海洋教育のカリキュラム開発—研究と実践—』日本教育新聞社, 2015年12月, pp.111-116

小玉重夫(単著)「連帯と切断の間で—つながりすぎ社会をどう相対化するか—」角松生史・山本顯治・小田中直樹編『現代国家と市民社会の構造転換と法』日本評論社, 2016年1月, pp.205-221

小玉重夫(単著)「18歳選挙権で高校教育はどう変わるのか—政治教育と党派教育の間—」『高校生生活指導』201号, 2016年3月, 教育実務センター, pp.46-53

〈翻訳〉

アンソニー・ギデンズ『『第三の道』以後の社会民主主義と世界を語る(付・小玉重夫 訳者解題・『ポスト第三の道』の帰趨)』『世界』875号, 2015年11月, pp.129-136

〈学会口頭発表〉

小玉重夫「哲学教育とシティズンシップ教育の架橋—考える市民の育成へ向けて—」第74回日本哲学学会大会 哲学教育ワークショップ「シティズン

シップ教育と哲学教育」2015年5月15日, 上智大学

小玉重夫「指定討論: 教育の再政治化と向き合うために」2015年8月28日, 日本教育学会第74回大会 ラウンドテーブル「教育政治学の創成—教育学と政治学の協働へ向けて—」お茶の水女子大学

Shigeo Kodama “Discussion”, International Symposium: Governance Reform and Quality Assurance in Education, 24, October, 2015, Center for School Excellence in Education, the University of Tokyo

小玉重夫「コメント: 原発事故後の学校教育の役割と関連づけて」, シンポジウム「原発事故で求められたメディアリテラシーと市民社会のリスクコミュニケーション」, 2016年2月27日(日), 筑波大学, 日本教育大学協会社会科部門関東地区会・日本社会科教育学会震災対応特別委員会

〈その他〉

小玉重夫(単著)「書評: 宮寺晃夫著『教育の正義論—平等・公共性・統合—』」教育哲学会『教育哲学研究』第111号, 2015年5月, pp.179-183

小玉重夫(単著)「主権者教育の意義」18歳選挙権研究会監修『18歳選挙権の手引き』国政情報センター, 2015年7月, pp.44-58

小玉重夫(単著)「今こそシティズンシップ教育を」『月刊教職研修』517号, 教育開発研究所, 2015年9月, pp.22-23

小玉重夫(単著)「高校生の政治活動を考える」『内外教育』第6487号, 時事通信社, 2016年3月, p.1

田中智志(教授)

〈著書〉

『図工・美術科教育』(教科教育学シリーズ第8巻) 橋本美保・田中智志 共監修, 増田金吾 編, 一藝社, 2015(平成27)年5月11日.

『音楽科教育』(教科教育学シリーズ第5巻) 橋本美保・田中智志 共監修, 加藤富美子 編, 一藝社, 2015(平成27)年5月18日.

『大正新教育の思想——生命の躍動』橋本美保・田中智志 共編著 東信堂 2015年7月18日.

『家庭科教育』（教科教育学シリーズ第7巻）橋本美保・田中智志 共監修，大竹美登利 編，一藝社，2015（平成27）年8月28日。

『カリキュラム・イノベーション——新しい学びの創造へ向けて』共著 第8章「存在論的に呼応する」執筆，東京大学出版会，2015年10月31日。

『算数・数学科教育』（教科教育学シリーズ第3巻）橋本美保・田中智志 共監修，藤井斉亮 編，一藝社，2015（平成27）年10月8日。

『国語科教育』（教科教育学シリーズ第1巻）橋本美保・田中智志 共監修，千田洋幸・中村和弘 共編，一藝社，2015（平成27）年12月8日。

『海洋教育のカリキュラム開発—研究と実践—』東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター編，第1章「海洋教育の哲学—海のプロフェンド・アクティブラーニングへ—」執筆，日本教育新聞社，2015（平成27）年12月5日。

『体育科教育』（教科教育学シリーズ第6巻）橋本美保・田中智志 共監修，松田恵二・鈴木秀人 共編，一藝社，2016（平成28）年2月2日。

〈雑誌論文〉

「存在に向かう思考——ハイデガーの「学び」」東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室『研究室紀要』第41号 pp.49-66 2015年7月31日。

「小中学生における海洋教育リテラシーの現状——「全国海洋リテラシー調査」の成果と課題」Ocean Newsletter, no. 369: pp.2-3. 海洋政策研究所編 2015年12月20日。

「教育学」『蛭雪時代4月臨時増刊全国大学学部案内号』旺文社，2016年3月30日，pp. 276-278。

比較教育社会学コース

恒吉僚子（教授）

〈分担執筆〉

恒吉僚子「『場』としての過程と異文化間教育研究」異文化間教育学会企画，加賀美常美代・徳井厚子・松尾知明編，明石書房，2016，14-31ページ。

〈論文〉

Tsuneoyoshi, Ryoko and Hideki Ito. (2015). "The AmerAsian School in Okinawa." 『学校教育高度化センター研究紀要』1号：175-187.

Tsuneoyoshi, Ryoko. (2015). "'Global Talent', Intercultural Understanding, and 'Englishization': A Preliminary View", 『学校教育高度化センター研究紀要』1号：5-24.

〈報告書等〉

Tsuneoyoshi, Ryoko (2015). "Confronting Inequity in Japanese School Education: A Comparative Perspective." Proceedings of the 59th World Meeting of the 国際教師教育協議会ICTE, 鳴門教育大学, ICTE共催，6月。

Tsuneoyoshi, Ryoko (2015). "Japanese Model of Classroom Management." Pp. 443-444 in *The SAGE Encyclopedia of Classroom Management*, edited by W. George Scarlett. Thousand Oaks, Cal.: Sage.

〈学会発表〉

恒吉僚子，「異文化間教育研究における乳幼児教育—社会学からの視点」

発達保育実践政策学センター（The Center for Early Childhood Development, Education, and Policy Research）2015，6月。

Tsuneoyoshi, Ryoko. "Confronting Inequity in Japanese School Education," International Council on Education for Teaching（国際教員養成協議会）第59回世界大会，鳴門教育大学，基調講演，2015年6月。

Tsuneoyoshi, Ryoko. Best Practices in Collaborative Learning: How a Culture of Collaboration in Education Can be Built and Sustained. Thailand's Educational Leader Symposium 2015, 基調講演（招待），Askorn, Chulalongkorn University, 2015年12月。

Tsuneoyoshi, Ryoko. "Challenges of Diversity in Asian Education," Comparative and International Education Society Asia (CESA) 2016, 招待講演，Manila, Philippines. Jan.29, 2016.

"Social and Emotional Learning in Japan", in session, Social Change and Educational Reform in Asia, Comparative and International Education Society 2016 annual meetings, Vancouver, Canada, 2016年3月

中村高康（教授）

〈著書〉

中村高康（研究代表），『『全国無作為抽出調査による『教育体験と社会階層の関連性』に関する実証的研究（コードブック・基礎集計表）』，2016，総頁数184.

〈雑誌論文〉

中村高康（単著），「学校評価と調査実習のコラボレーション—東京大学教育学部比較教育社会学コース「教育社会学調査実習」の新たな試み—」，『社会と調査』第15号，社会調査協会，2015，

pp.112-115.

橋本 鉦 市 (教授)

〈著書〉

橋本鉦市 (編)『専門職の領域と報酬』玉川大学出版部, 2015年9月, 全266頁。

橋本鉦市 (共編訳)『高等教育の社会学』(伊藤彰浩・阿曾沼明弘との編訳) 玉川大学出版部, 2015年7月, 全476頁。

〈雑誌論文〉

橋本鉦市「戦後日本における大学広告の内容分析—『蛭雪時代』(昭和24~63年)を対象として—」『大学論集』第48集, 2016年3月, 60-80頁。

橋本鉦市「大学の自己認識に関する一試論—東大総長の入学式・卒業式辞内容の計量テキスト分析から—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第55巻, 2016年3月, 129-137頁。

Sakata, M., Kobaru, A. and Hashimoto, K. 2016, "The Recognition of Professional Competencies: focusing on managers of workplaces and faculties of training institutions", Bulletin of the Graduate School of Education, The University of Tokyo, Vol. 55, pp.101-117.

〈報告書〉

橋本鉦市編『専門職養成カリキュラムをめぐるステークホルダーの合意形成に関する実証的研究』(2012~2015年度科学研究費補助金・基盤B 最終報告書)、全234頁、2016年3月

本 田 由 紀 (教授)

〈著書〉

本田由紀 (編著),『現代社会論—社会学で探る私たちの生き方』, 有斐閣, 2015

本田由紀 (単著),「カリキュラムの社会的意義」『職業的意義のある教育とその効果』東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会編『カリキュラム・イノベーション—新しい学びの創造へ向けて』, 東京大学出版会, 2015.

本田由紀 (共著),『岩波新書で「戦後」を読む』(小森陽一氏, 成田龍一氏との共著), 岩波新書, 2015, 総頁数277.

本田由紀 (単著),「戦後日本型循環モデルの破綻と若年女性」, 小杉礼子・宮本みち子編著『下層化する女性たち—労働と家庭からの排除と貧困』勁草書房, 2015.

〈学会発表〉

本田由紀 (共同学会発表),「大学教育の分野別質保証に関する実証研究—大学4年生を対象とする第2波パネル調査結果より」(河野志穂氏との共同発表), 日本教育社会学会第67回大会, 2015, 駒澤大学

仁 平 典 宏 (准教授)

〈著書〉

仁平典宏 (分担執筆),『震災と市民1——連帯経済とコミュニティ再生』(似田貝香門・吉原直樹編), 東京大学出版会, 2015, 総ページ数7.

〈雑誌論文〉

仁平典宏 (単著),「〈教育〉化する社会保障と社会的排除——ワークフェア・人的資本・統治性」,『教育社会学研究』第96号, 日本教育社会学会編, 2015, pp. 175-196.

仁平典宏 (共著),「居住5年目を迎えた岩手県陸前高田市仮設住宅における被災者の暮らし——被災住民のエンパワメント形成による地域再生の可能性と課題V」,『現代福祉研究』16号, 法政大学現代福祉学部編, 2016, pp.135-176.

〈その他〉

仁平典宏 (単著),「居酒屋社会学談義 第4夜——J社会学, 語り口, 社会運動論」,『POSSE』27号, NPO法人POSSE編, 2015, pp. 134-151.

仁平典宏 (単著),「居酒屋社会学談義 第5夜——近代, 社会学の誕生, 階層」,『POSSE』29号, NPO法人POSSE編, 2015, pp. 178-197.

仁平典宏 (対談),「古市くん, 社会学を学び直さない!! 第4回 仁平典宏先生に「社会学者の規範」を聞く!」,『小説宝石』2015年7月号, 光文社, 2015, pp.356-363

〈学会発表〉

仁平典宏 (学会発表),「戦後教育における「市民」の位置——日本型生活保障システムとの関連で」, 日本教育社会学会第67回大会, 2015

生涯学習基盤経営コース

影 浦 峯 (教授)

〈図書の一部・特集号編集〉

Patrick Drouin, Natalia Grabar, Thierry Hamon and Kyo Kageura, Special Issue of Terminology: Terminology across Languages and Domains, 21(2), 2015.

Rei Miyata, Anthony Hartley, Kyo Kageura and

Cécile Paris, “‘Garbage let’s take away’: Producing understandable and translatable government documents: A case study from Japan,” Nepal, S. et al. (eds) *Social Media for Government Services*. New York: Springer, p. 367-393, 2015.

影浦峽, 「翻訳の社会的意味」澤田治美編. 『ひつじ意味論講座7 意味の社会性』東京: ひつじ書房, 2015, pp.107-124.

〈国際会議〉

Shuntaro Yada and Kyo Kageura, “Identification of tweets that mention books: An experimental comparison of machine learning methods,” ICADL 2015. 10-11 December 2015, Seoul.

Rei Miyata, Anthony Hartley, Cécile Paris, Midori Tatsumi and Kyo Kageura, “Japanese controlled language rules to improve machine translatability of municipal documents,” Machine Translation Summit XV. 30 October-3 November 2015, Miami, Florida. p. 90-103.

Miki Iwai, Takashi Ninomiya and Kyo Kageura, “Acquiring distributed representations for verb-object pairs by using word2vec,” 29th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation. 29 October-1 November 2015, Shanghai. p. 328-336.

Shohei Yamada, Rui Shimura, Bin Umino, Shin’ichi Toda and Kyo Kageura, “Physico-symbolic traits of Japanese bestsellers since WWII,” A-LIEP 2015. 28-30 October 2015, Manila. p. 134-148.

Iris Vogel, Ray Miyata, Ulrich Apel, Ryo Murayama, Koichi Takeuchi, Kyo Kageura, Ryoko Adachi and Wolfgang Fanderl, “Die flexible Suche nach Varianten von Kollokationen mittels einer Online-Plattform,” 16. Deutschsprachigen Japanologentages, 26-28 August 2015, Munich, Germany.

Kyo Kageura, Anthony Hartley, Martin Thomas and Masao Utiyama, “Scaffolding and guiding trainee translators: the MNH-TT platform,” TAO-CAT 2015, 18-20 June 2015, Angers, France.

Masao Utiyama, Kyo Kageura, Martin Thomas and Anthony Hartley, “MNH-TT: A platform to support collaborative translator training,” EAMT 2015, 11-13 May 2015, Antalya, Turkey. p. 228.

〈国内学会〉

影浦峽, Martin Thomas, Anthony Hartley, 内山将夫

「みんなの翻訳実習における「足場」と翻訳力・翻訳者力~みんなの翻訳第6報~」言語処理学会第22回年次大会, 仙台, 2015年3月7-9日.

豊島知穂, 田辺希久子, 藤田篤, 影浦峽, 「翻訳教育での利用を意識した翻訳エラー分類体系の再構築」言語処理学会第22回年次大会, 仙台, 2015年3月7-9日.

影浦峽, Anthony Hartley, 内山将夫, Martin Thomas, 「みんなの翻訳実習」日本通訳翻訳学会年次大会プレカンファレンス講義, 2015年9月11日.

〈その他〉

Patrick Drouin, Natalia Grabar, Thierry Hamon and Kyo Kageura, “Introduction to the special issue: terminology across languages and domains,” *Special Issue of Terminology: Terminology across Languages and Domains*, 21(2), p. 139-150, 2015.

影浦峽, 「巻頭言: 言葉の物質性が作動するとき」*AAMT Journal*, 59, June 2015, p.2-3.

〈社会貢献〉

影浦峽, 竹山美宏 「[対談] 論理は対話のために: 壊れた議論の前提を取り戻す」『科学』2015年10月号, p.944-949.

影浦峽 「あれから五年, リスクコミュニケーションが私たちから奪うもの」『現代思想』2016年3月号, p.170-185.

牧野 篤 (教授)

〈著書〉

(1) 農的な生活がおもしろい—年収200万円で豊かに暮らす!

さくら舎 2014年10月 pp.229

(2) 生きることとしての学び—2010年代・自生する地域コミュニティと共変化する人々

東京大学出版会 2014年6月 pp.335

〈報告書〉

(1) The Social 日本高齢社会的願景: 台日高齢研究円卓討論「下一步・尋 高齢社会的利基」論壇成果報告書

国立中正大学人文與社会科学研究センター, 国立中正大学高齢社会研究センター, 国立中正大学高齢教育研究センター, 国立中正大学成人及繼續教育学系, pp.187 2015年1月

〈論文・査読あり〉

(1) 分配から生成へ, または省察的關係論的視点へ—教育学研究のエビデンスを問うために—, 日本

教育学会『教育学研究』第82巻第2号, 2015年6月, pp.287-298

- (2)「学び」の生成論的転回へー社会の持続可能性と生涯学習を問う視点一, 日本社会教育学会年報編集委員会『社会教育としてのESD』(日本の社会教育第59集), 東洋館出版社, 2015年9月, pp.55-65

【論文・査読なし】

- (1)公民館の古くて新しい役割ー住民がアクターとなる〈学び〉の場
Voters No.23, pp.4-5 2015年1月
- (2)当事者になり続けることー共同研究2年目の課題／「はじめに」に代えてー
東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『学習基盤社会研究・調査モノグラフ6当事者になり続けるということー内灘町公民館調査報告2ー』, pp.1-4 2014年11月
- (3)社会をつくる生涯学習ー行政と教育の連携によるまちづくりー
市町村職員中央研修所(市町村アカデミー)『アカデミア』第110号, pp.26-31 2014年8月
- (4)身体性の回復へーMONO-LAB-JAPANが試みたことー
東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『ものづくりを通じた新しいコミュニティのデザインーMONO-LAB-JAPANの活動を中心にー』(学習基盤社会研究・調査モノグラフ7), pp.224-228 2014年12月
- (5)おしゃべりでにぎやかなものづくり
東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『ものづくりを通じた新しいコミュニティのデザインーMONO-LAB-JAPANの活動を中心にー』(学習基盤社会研究・調査モノグラフ7), pp.3-9 2014年12月
- (6)コミュニティの「学習」化へ①②
『判例地方自治』(ぎょうせい)No.386, pp.101-105, No.387, pp.102-106 2014年11月・12月
- (7)高齢社会的社区動能: 多世代交流型社区的構想と実践ー千葉県柏市高柳地区的嘗試ー
胡夢鯨主編『日本高齢社会動能』, 台湾樂齡発展協会・活石文化事業有限公司, pp.153-199 2014年11月
- (8)生活実感に寄り添う社区教育へー上海市の社区教育を一例にー, 松田武雄編著『社会教育福祉の諸相と課題ー欧米とアジアの比較研究ー』, 第4

章, 大学教育出版, 2015年4月, pp.67-83

- (9)住民がアクターとなる「学び」の場ー公民館の新しい役割(前編・後編), 月刊公民館(平成27年4月号(通巻第695号)), 2015年4月, pp.17-23, (平成27年5月号(通巻第696号)), 2015年5月, pp.4-10
- (10)キッザニアの魅力はどこにあるのか, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室KidZania調査チーム『キッザニアの魅力はどこにあるのかーキッザニア調査結果報告ー』(学習基盤社会研究・調査モノグラフ8), 2015年7月, pp.1-20
- (11)学習を基盤とする持続可能で価値多元的なコミュニティへープロジェクト志向の生涯学習の構築ー, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『学習基盤社会研究・調査モノグラフ9持続可能で価値多元的なまちづくりープロジェクト志向の生涯学習へー(2012年-14年度科学研究費助成事業(基盤研究C)「学習を基盤とする持続可能で価値多元的な社会モデルの構築」(課題番号24530993)研究報告書), 2015年9月, pp.1-3
- (12)〈社会〉をつくる生涯学習, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『学習基盤社会研究・調査モノグラフ9持続可能で価値多元的なまちづくりープロジェクト志向の生涯学習へー(2012年-14年度科学研究費助成事業(基盤研究C)「学習を基盤とする持続可能で価値多元的な社会モデルの構築」(課題番号24530993)研究報告書), 2015年9月, pp.7-25
- (13)静かなダイナミズムが「まち」を支えるー飯田市公民館調査からー, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『学習基盤社会研究・調査モノグラフ9持続可能で価値多元的なまちづくりープロジェクト志向の生涯学習へー(2012年-14年度科学研究費助成事業(基盤研究C)「学習を基盤とする持続可能で価値多元的な社会モデルの構築」(課題番号24530993)研究報告書), 2015年9月, pp.26-48
- (14)当事者による地域経営の〈場〉ー内灘町: 古い公民館の新しさー, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『学習基盤社会研究・調査モノグラフ9持続可能で価値多元的なまちづくりープロジェクト志向の生涯学習へー(2012年-14年度科学研究費助成事業(基盤研究

C)「学習を基盤とする持続可能で価値多元的な社会モデルの構築」(課題番号24530993) 研究報告書), 2015年9月, pp.49-74

(15)多世代交流型コミュニティの構想と実践—千葉県柏市高柳地区の試み—, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『学習基盤社会研究・調査モノグラフ9 持続可能で価値多元的なまちづくり—プロジェクト志向の生涯学習へ— (2012年—14年度科学研究費助成事業(基盤研究C)「学習を基盤とする持続可能で価値多元的な社会モデルの構築」(課題番号24530993) 研究報告書), 2015年9月, pp.75-102

(16)社会における学びと身体性—市民性への問い返し/社会教育の視点から, 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会編『カリキュラム・イノベーション—新しい学びの創造へ向けて—』, 東京大学出版会, 2015年10月, pp.195-214

(17)一人ひとりが地域社会のフルメンバーとして, 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室内灘町社会教育調査チーム『学習基盤社会研究・調査モノグラフ10 住民を主役にする公民館—内灘町公民館調査報告3—』, 2015年11月, pp.1-7

(18)問われる「当事者」としての自覚と志—深読み中教審答申, 月刊公民館(平成28年2月号(通巻705号)), 2016年2月, pp.21-26

〈論文(共著)〉

(1)何が議論され, 何がイメージされたのか—内灘町公民館の新たな役割—

東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『学習社会基盤研究・調査モノグラフ6 当事者になり続けるということ—内灘町公民館調査報告2—』, 古壕典洋・大山宏と共著, 担当部分「結び」, pp.93-98 2014年11月

〈学会発表・国内〉

(1)住民の社会参加と地域活動に関する調査研究—長野県飯田市千代地区・東野地区を対象とした「地域社会への参加に関するアンケート調査」の分析—(中村由香らとの共同研究発表)
日本公民館学会第13回研究大会 木更津市立中央公民館 2014年12月6日

〈学会発表・国外・招待および基調講演〉

(1)Turning into Community: Transformation of social structure and lifelong learning administration in Japan

ASEM International Seminar on Lifelong Learning 2014 at the Putra World Trade Center, Kuala Lumpur, Malaysia The Putra World Trade Center August 24-26, 2014

(2)The Social: 日本高齢社会的願景

国立中正大学人文社会科学研究中心, 国立中正大学高齢社会研究中心, 国立中正大学高齢教育研究中心, 国立中正大学成人及継続教育学系 台日高齢研究円卓討論「下一步・尋 高齢社会的利基」論壇 中華民國(台湾)国立中正大学 2014年11月26日—12月3日

(3)Re-building the 'Society': Japan's Highly Aged Society and its Challenge, International Conference on New Paradigm of Education for Longevity Society: Population, Culture and Education, June 16 2015, Chunbok National University (South Korea),

(4)〈社会〉をつくる「学び」—少子高齢・人口減少・大衆消費社会と生涯学習/日本の事例—, 第7回日本社会教育学会・韓国平生教育学会韓日学術交流研究大会「地域づくりと社会教育」国際シンポジウム, 2015年10月17日-18日, 済州国立大学(韓国)

(5)從「国家」転向「草根社区」—少子高齢和人口減少日本社会的社会教育和終身学習, 社会教育六十周年開創終身教育新契機國際學術研討会(2015 International Conference on Entrepreneur Lifelong Education), 2015年11月26日-27日, 国立台湾師範大学(台湾)

〈雑誌記事その他〉

(1)具体的な自分を創造する「農的な生活」, 月刊MOKU2015年6月号, 2015年6月, pp.60-63

(2)〈社会〉をつくる「学び」, 第7回日本社会教育学会・韓国平生教育学会韓日学術交流研究大会『地域づくりと社会教育』, 2015年10月, pp.141-159

(3)座談会「まちなかキャンパス」が創る学び, 月刊公民館2015年10月号, 2015年10月, pp.4-16

(4)キッザニアはキッザニアだけで完結しない。,, KCJ GROUP株式会社『キッザニア白書2016』, 2016年2月, pp.15-17

(5)パネルディスカッション これからの公民館のあり方, 第37回全国公民館研究集会in鳥取・第38回中国・四国地区公民館研究集会鳥取大会「未来を拓く公民館力—人が輝き 地域がきらめく—」記録, 2016年3月, pp.29-42

- (6)つながりという豊穡さー「はじめに」に代えて
一、東京大学教育学部社会教育学研究室『“飯田”
というつながりー「東京大学教育学部社会教育学
演習」2015年度飯田市社会教育調査実習報告』、
2016年3月、pp.i-iv
- (7)研究で見えてきた親子の対話を生む“キッザニア
効果”，『キッザニア東京完全ガイド2016-17年版』、
株式会社KADOKAWA、2016年3月、pp.40-41

李 正 連 (准教授)

〈論文〉

- 李正連 (共著)「東アジアにおける社会教育・生涯
学習法制20年」(上田孝典氏との共著)、東京・沖
縄・東アジア社会教育研究会 (TOAFAEC)『東
アジア社会教育研究』第20号、2015、pp.10-19.
- 李正連 (単著)「学習を基盤としたマウル共同体
づくりへの挑戦ー韓国の平生教育実践協議会の
取り組みを中心にー」『持続可能で価値多元的
なまちづくりープロジェクト志向の生涯学習へ
ー』(2012-14年度科学研究費助成事業 (基盤研
究 (C))「学習を基盤とする持続可能で価値多
元的な社会モデルの構築」(研究代表者: 牧野篤)、
2015、pp.123-131.

〈学会発表・招待講演等〉

- 李正連「植民地朝鮮における実業教育政策と朝鮮民
衆」名古屋大学大学院教育発達科学研究科特別講
義、2015.6.16
- 李正連「韓国生涯教育の躍動と展望」華東師範大
学教育学部職業教育与成人教育研究所特別講演、
2015.10.8.
- 李正連「植民地期朝鮮における夜学と女性の学び～
夜学経験者のオーラルヒストリーをもとに～」ア
ジア教育学会第10回研究大会、有明教育芸術短期
大学、2015.10.24.
- 李正連「学びを基盤とする日韓市民交流の成果と課
題ー日韓友好の新しい地平に向けてー」横浜市立
大学特別講義、2016.1.25.

〈その他〉

- 李正連「自治を育む新たな挑戦ー「おわりに」に代
えてー」東京大学大学院教育学研究科社会教育
学・生涯学習論研究室内灘町社会教育調査チーム
『住民が主役になる公民館ー内灘町公民館調査報
告3ー』、2015、pp.132-134.
- 李正連「やんばる対談に参加してー名護社会教育・
公民館活動への期待」東京・沖縄・東アジア社会

教育研究会 (TOAFAEC)『東アジア社会教育研究』
第20号、2015、pp.179-180.

新 藤 浩 伸 (准教授)

〈著書〉

デヴィッド・J・ジョーンズ (著)、新藤浩伸 (監訳)、
『成人教育と文化の発展』、東洋館出版社、2016年
2月、総頁数276.

〈学会発表〉

新藤浩伸、「市民文化活動支援のネットワークの歴
史と実践: MailoutおよびCultureActionEuropeを対
象に」、文化経済学会 (日本) 研究大会、2015年
7月5日、駒沢大学.

〈講演等〉

新藤浩伸、「大人の学びと文化の発展」、ラーニング
フルエイジング研究会「学びあふれる社会のため
に、芸術文化活動ができること」、2016年2月16
日、東京大学情報学環・福武ホール.

新藤浩伸、「飯田の可能性」、2015年12月9日、長野
県飯田風越高等学校.

新藤浩伸、「ドイツの教育実践を支えるもの」、シン
ポジウム「ドイツと日本の芸術教育、文化環境の
比較と可能性」、2015年10月21日、ドイツ文化会
館.

新藤浩伸、「地域社会におけるミュージアムの存在
意義とはー法体系からミュージアムを考える
ー」学芸員技術研修会 (平成27年度文化庁「地
域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」)、
2015年9月21日、福岡市美術館.

新藤浩伸、田村栄作、村田修治、吉田敬、高野英江、
「地域まるごと博物館」(全5回)、柏市豊四季台
くるるセミナー、2015年6月、柏地域医療連携セ
ンターほか.

大内俊、新藤浩伸、「今あらためて地域における公
民館の役割について考える」、第9回田無公民館
まつり、2015年5月16日、西東京市田無公民館.

〈報告書〉

新藤浩伸 (単著)、「博物館をめぐるアクティビティ
構築の試みー千葉県柏市「くるるセミナー」の報
告を中心に」、学習基盤社会研究・調査モノグラ
フ9『持続可能で価値多元的なまちづくりープロ
ジェクト志向の生涯学習へー2012-2014年度科学
研究費助成事業 (基盤研究C)「学習を基盤とす
る持続可能で価値多元的な社会モデルの構築 (研
究代表者: 牧野篤) 研究報告書」東京大学大学

院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室,
2015年9月, pp. 103-122.

大学経営・政策コース

小方直幸(教授)

〈雑誌論文〉

小方直幸2015「政府と大学の自治－教員養成分野のミッションの再定義」『高等教育研究』第18集, 171-190頁。

〈その他〉

小方直幸2015「退学率・卒業率を読み解く」『大学の实力』, 中央公論新社, 12-13頁。

山本 清(教授)

〈著書〉

「地域経済と国家戦略特区」『日本経済の再生と国家戦略特区』安田信之助編著第1章, pp.1-21, 2015.6.
「第3章 公会計制度改革に関する研究レビュー」『新しい地方公会計の理論, 制度および活用実践』(中間報告) 日本会計研究学会特別委員会報告, pp.34-45. 2015.9.

「市民意識と行財政の運営原理」『地方自治体の行財政改革の現状と今後の課題Ⅰ』田尾雅夫編(愛知学院大学モノグラフ) pp.30-36, 2016.3.

〈論文〉

Does Performance Information Impact Budgeting and Planning in the Public Sector? An Empirical Analysis in Local Government, 単著, 15th CIGAR Conference*, Malta, 4-5th June

「公的部門のPDCAサイクルの再検証Ⅱ」, 単著, 2015.4, 『会計と監査』第66巻第4号, pp.20-25.

「ガバナンスの観点からみた大学組織の変遷」, 単著, 2015.5, 『高等教育研究』第18集, pp.29-47.

「独立財政機関の機能と民主的アカウンタビリティ」 単著, 2015.11, 『ECO-FORUM』Vol.31, No.1, pp.24-29.

「ニュージーランドと日本の行政改革－市民調査にみる比較」 単著 2016.1.

『会計検査資料』No.604, pp.88-90.

「証拠に基づく大学政策の推進と課題」 単著 2016.3. 『大学経営政策研究』*第6号, pp 3-16.

「政治家の公会計情報利用に関する研究枠組みについて」 単著 2016.3. 『公会計研究』*第17巻第1・2号, pp.114-127.

福留東土(准教授)

〈著書〉

(分担執筆)

福留東土「アメリカ合衆国の教養教育の歴史的展開の一断面－19世紀後半から20世紀前半のハーバード大学を事例として」広島大学大学院総合科学研究科編(青木利夫・平手友彦責任編集)『世界の高等教育の改革と教養教育－フンボルトの悪夢』叢書インテグラレ, 丸善出版, 2016年, 66-75頁。

〈雑誌論文〉

福留東土「米国におけるリベラルアーツ分野の大学院教育とその専門職的機能－歴史学を事例として－」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第55巻, 2016年3月, 183-191頁。

福留東土「大学の組織運営改革の事例研究－九州大学」『大学の組織運営改革と教職員の在り方に関する研究：最終報告書』国立教育政策研究所, 2016年3月, 57-74頁。

〈学会発表〉

Hideto Fukudome, "Issues and Possibilities for Graduate Education in Japan: A Comparative Analysis" 3rd Conference of Higher Education Research Association (HERA), Tamkang University, Taiwan, 2015.5.

福留東土「20世紀前半のハーバード・カレッジにおける教育改革－自由選択科目制から集中－配分方式へ－」日本比較教育学会第51回大会, 於宇都宮大学, 2015年6月。

福留東土「アメリカの修士課程における専門職教育－日本との比較の立場から－」日本高等教育学会第18回大会・課題研究「日本の大学院教育を考える(2)－英国・米国・中国との比較－」, 於早稲田大学, 2015年6月。

Hideto Fukudome, "Conflict and Linkage between Research and Teaching of Academic Professions," 16th International Conference on Education Research (ICER), Seoul National University, Korea, 2015.10.

福留東土「ローレンス・ローウェルによるハーバード・カレッジ改革」第38回大学史研究セミナー, 大学史研究会, 於南山大学, 2015年11月。

両角 亜希子(准教授)

〈著書〉

(分担執筆)

両角亜希子「高大接続の視点からカリキュラム・イ

ノベーションを考える」東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会編『カリキュラム・イノベーション 新しい学びの創造へ向けて』2015年10月

〈論文等〉

両角亜希子「日本の大学職員—調査データから」『IDE現代の高等教育』No.569, 2015年4月号

両角亜希子「文系学部のプロフィール」『IDE現代の高等教育』No.575, 2015年11月号

両角亜希子「私学経営の選択」『IDE現代の高等教育』No.577, 2016年1月号, 35-41頁

両角亜希子「18歳人口減少と私学経営・政策の課題」『ECO-FORUM』Vol.31 No.2, 2016年1月号, 3-9頁

両角亜希子「女子学生に必要な21世紀型キャリア教育を切り開く（事例：昭和女子大学）」リクルート『カレッジマネジメント』No.196, 2016年1-2月号, 20-23頁

両角亜希子「どのような大学が多面的な入試改革を導入するのか」リクルート『カレッジマネジメント』197号, 2016年3-4月, 18-23頁

王帥・両角亜希子「大学上級管理職の経営能力養成の現状と将来展望—上級管理職調査から」『大学経営政策研究』第6号, 2016年3月, 17-32頁

塩田邦成・両角亜希子「大学教員の大学改革へのモチベーション」『大学経営政策研究』第6号, 2016年3月, 33-48頁

両角亜希子「教学マネジメントの確立の効果とそのための方策」株式会社リベルタス・コンサルティング『平成27年度文部科学省委託調査「大学教育改革の実態の把握及び分析等に関する調査研究」調査報告書』2016年3月, 195-211頁

〈口頭発表〉

両角亜希子「私立大学の連携・統合」広島大学高等教育研究開発センター第43回研究員集会（2015年11月3日）

両角亜希子「これからの地方私立学校が生き残れる条件—中長期経営計画からみた地方・中小大学の取り組み—」茨城キリスト教学園 全体教職員研修会（2015年11月21日）

両角亜希子「大学経営・政策コースにおける大学経営人材養成の取り組み—目的・現状・展望—」地域科学研究会セミナー（大学院・センターのスタッフ育成力の活用策）（2015年12月22日）

両角亜希子「高等教育政策の動向と大学への影響」

白梅学園大学 教職員研修（2016年1月14日）

両角亜希子「保育者養成の高学歴化に関する研究—高校生の進路選択の観点から—」東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター2015年度 関連SEEDSプロジェクト成果報告会（2016年3月6日, 東京大学赤門総合研究棟 A200）

〈その他〉

書評 林透著『高等教育における視学委員制度の研究：認証評価制度のルーツを探る』日本教育学会『教育学研究』82(2), 321-323, 2015-06

教育心理学コース

遠藤利彦（教授）

〈著書〉

箱田裕司・遠藤利彦（編著）. (2015). 『本当のかしこさとは何か：感情知性（EI）を育む心理学』. 誠信書房.

遠藤利彦 (2015). 両刃なる：合理性と非合理性のあわいに在るもの. 渡邊正孝・船橋新太郎（編）, 『情動と意識決定：感情と理性の統合』（pp.93-131）. 朝倉書店.

遠藤利彦 (2015). 思春期発達の基盤としてのアタッチメント. 長谷川寿一（監修）・笠井清登他（編）, 『思春期学』（pp.45-64）. 東京大学出版会.

遠藤利彦 (2016). 子どもの社会性発達と子育て・保育の役割. 秋田喜代美監修, 『あらゆる学問は保育につながる』（pp. 225-250）. 東京大学出版会.

〈学術誌等論文〉

遠藤利彦 (2015). 進化的アタッチメント理論から見る子ども期の被養育経験と生涯発達. チャイルド・サイエンス（日本子ども学会誌）, 11, 4-8.

遠藤利彦 (2015). “contingency”の視座から見る自己の萌芽と発達. チャイルド・ヘルス, 24, 260-263.

遠藤利彦 (2015). 二つの社会的世界に生きる子ども. 発達, 143, 30-35.

川本哲也・遠藤利彦 (2015). 青年期における非言語性知能の発達とコホート効果. 発達心理学研究（日本発達心理学会誌）, 26, 144-157.

Sakakibara, R. & Endo, T. (2015). Cognitive appraisal as a predictor of cognitive emotion regulation choice. *Japanese Psychological Research*, 58, 175-185.

川本哲也・遠藤利彦 (2015). 青年期における非言語性知能の発達とコホート効果. 発達心理学研究

(日本発達心理学会誌), 26, 144-157.

Tetsuya, K. & Endo, T. (2015). Personality change in adolescence: Results from a Japanese sample. *Journal of Research in Personality*, 57, 32-42.

Tetsuya, K. & Endo, T. (2015). Genetic and environmental contributions to personality trait stability and change across adolescence: Results from a Japanese twin sample. *Twin Research and Human Genetics*, 18, 545-556.

遠藤利彦 (2016). アタッチメントとレジリエンスのあわい. 子どもの虐待とネグレクト (日本子ども虐待防止学会機関誌), 17, 329-339.

遠藤利彦 (2016). アタッチメント理論から見る病児ケア: 子どもが安心して育つために. 医療と保育 (日本医療保育学会誌), 14, 58-66.

川本哲也・榊原良太・村木良孝・小島淳広・石井悠・遠藤利彦 (2016). 体験活動を通じた大学生の社会情緒的発達: 感情制御に着目して. 発達心理学研究 (日本発達心理学会誌), 27, 32-46.

遠藤利彦 (2016). 社会性発達の揺籃としてのアタッチメント: 虐待との関連も視野に入れ. 子どものこころとからだ (日本小児心身医学会誌), 24, 434-436.

遠藤利彦 (2016). 乳幼児期の保育と教育は表裏一体のものとして在る. 保育通信, 732, 4-9.

〈その他論文・報告書・記事等〉

遠藤利彦 (2015). 『発達教育』, 2015年10月号〜12月号, 3回連載. 「アタッチメントという言葉が意味するもの」「アタッチメントと愛の理論」「自閉症スペクトラム児における愛着」. 公益社団法人・発達協会.

遠藤利彦 (2015-2016). 『保育ナビ』, 2015年4月号〜2016年3月号, 12回連載. 「赤ちゃん学から見るアタッチメント」「そもそもアタッチメントって何?」「他の生き物に見るアタッチメント」「ジョン・ボウルビィとアタッチメント」「アタッチメントと安心感の環」「アタッチメントと子どもの感情を立て直すこと」「アタッチメントと子どもの感情を映し出すこと」「子どもにとって情緒的に利用可能な存在であること」「アタッチメントと本当の自己の発達」「アタッチメントの個人差と養育環境」「アタッチメントと不適切な養育」「保育におけるアタッチメント」. フレーベル館.

遠藤利彦 (2015-2016). 『ちやいどネット

OSAKA』, 49号〜56号, 8回連載. 「アタッチメント(1): 子どもはただおっぱいが欲しくてくつつくの?」「アタッチメント(2): 子ザルの実験が物語るもの」「アタッチメント(3): 改めてアタッチメントとは何か?」「アタッチメント(4): アタッチメントと安心感の環」「アタッチメント(5): アタッチメントと基本的な信頼感」「アタッチメント(6): アタッチメントと心を理解する力」「アタッチメント(7): アタッチメントに個人差が生じてくる理由」「アタッチメント(8): 家庭外の大人の役割」. 特定非営利活動法人ちやいどネット大阪.

遠藤利彦 (2016). 就学前期におけるアタッチメントと社会情緒的発達. 全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会・文部科学省委託研究『幼児期の非認知的な能力の発達をとらえる研究ー感性・表現の視点からー』報告書.

〈学会発表〉

遠藤利彦. 「アタッチメント理論から見る病児ケアー子どもが安心して育つためにー」. 教育講演. 日本保育医療学会第19回大会 (日本赤十字看護大学広尾キャンパス). 2015年6月13日.

永房典之・板倉昭二・久保ゆかり・渡辺弥生・遠藤利彦. 「感情と社会性の発達」(大会企画シンポジウム). 指定討論. 日本感情心理学会第23回大会 (新渡戸文化短期大学中野キャンパス). 2015年6月13・14日.

志村洋子・遠藤利彦・乙部貴幸・久保健太・溝口義朗・波里史子・牧野展子・木下純・小野恭子. 「実践的赤ちゃん学ー保育と研究の交わるころー」(プレコンgres). 話題提供・指定討論. 日本赤ちゃん学会第15回学術集会 (かがわ国際会議場). 2015年6月26日.

志村洋子・日下隆・三木崇範・加藤郁子・小椋たみ子・遠藤利彦. 「“科学 de 考える”お母さんと赤ちゃんの大切な関係」(大会企画公開シンポジウム). 小講演. 日本赤ちゃん学会第15回学術集会 (かがわ国際会議場). 2015年6月27・28日.

遠藤利彦・坂口菊恵・金政祐司・高橋翠・遠藤由美. 「アタッチメントとセクシャリティの認知心理学」(大会企画シンポジウム). 企画・司会. 日本認知心理学会第13回大会 (東京大学本郷キャンパス). 2015年7月4・5日.

本島優子・松本学・吉村麻奈美・神谷哲司・荒木晃子・遠藤利彦. 「さまざまな領域における家族支援

ー研究と臨床の対話を通じてー」(準備委員会企画シンポジウム)。指定討論。日本家族心理学会第32回大会(山形大学小白川キャンパス)。2015年7月18～20日。

田熊美保・遠藤利彦・高橋翠。「Starting Strong IV: 日本のこれからの保育の質向上のために」。指定討論。発達保育実践政策学センター設立シンポジウム(東京大学本郷キャンパス・福武ラーニングセンター)。2015年8月22日。

山崎知克・北山真次・遠藤利彦・田邊昇・泉裕之・小平隆太郎。「虐待と法律、アタッチメント」(大会企画シンポジウム)。小講演。日本小児心身医学会第33回学術集会(国立オリンピック記念青少年総合センター)。2015年9月11～13日。

篠原郁子・遠藤利彦・石井佑可子・蒲谷慎介・川本哲也・河本愛子・武藤世良。「非認知的能力をめぐる研究と心理学ー社会の発展・個人の発達・教育の可能性ー」(公募シンポジウム)。企画・指定討論。日本心理学会第79回大会(名古屋国際会議場)。2015年9月22～24日。

遠藤利彦・志村洋子・佐藤将之・高山静子・濱名清美・汐見稔幸。「保育環境のあり方を問い直す」(公開シンポジウム)。企画・司会。日本学術会議主催学術フォーラム「乳児を科学的に観る: 発達保育実践政策学の始動」(日本学術会議講堂)。2016年3月27日。

〈講演〉

遠藤利彦 招待講演: 社会性発達の揺籃としてのアタッチメント。保育総合研究会・第51回定例会(市ヶ谷私学会館)。2015年5月20日。

遠藤利彦 招待講演: アタッチメントと社会性の発達。平成27年度千葉市民間保育園協議会講演会(千葉きぼーる)。2015年7月14日。

遠藤利彦 招待講演: 一人でいること・いられることー自分の世界を探索するー。第5回茅ヶ崎市響きあい教育シンポジウム(茅ヶ崎市役所コミュニティホール)。2015年8月3日。

遠藤利彦 招待講演: 社会性・感情発達の揺籃としてのアタッチメント。阿賀野児童福祉会・講演会(新潟ユニゾンプラザ)。2015年8月26日。

遠藤利彦 招待講演: 社会性発達を育む乳幼児期ー保育現場におけるアタッチメントの重要性ー。日本保育協会青森県支部保育者研修会(ホテル青森)。2015年9月30日。

遠藤利彦 招待講演: アタッチメントをつなぐ: 支

援者に求められる視点Ⅱ。平成27年度神奈川県児童福祉協議会心理士会講演会(神奈川県社会福祉会館)。2015年10月13日。

遠藤利彦 招待講演: 乳幼児のこころ: 子育て・子育ての発達心理学。平成27年度千葉県保育協議会・保育士部会乳児保育・健康管理研修会(千葉県自治会館)。2015年10月27日。

遠藤利彦 招待講演: 就学前期におけるアタッチメントと子どもの社会情緒的発達。全国国立大学附属学校連盟幼稚園部会特別講演会(お茶の水女子大学)。2015年11月3日。

遠藤利彦 招待講演: 共同注意と発達支援。日本臨床発達心理士会群馬支部・公開シンポジウム(高崎健康福祉大学)。2015年11月7日。

遠藤利彦 招待講演: 就学前期におけるアタッチメントと子どもの社会情緒的発達。神奈川県乳児保育講演会(横浜女子短期大学)。2015年11月10日。

遠藤利彦 招待講演: アタッチメントと子どもの社会情緒的発達。平戸市保育全体研修講演会(田平活性化センター)。2015年11月15日。

遠藤利彦 招待講演: アタッチメントと子どもの社会性の発達。埼玉県特別支援コーディネーター講演会(埼玉県総合教育センター)。2015年12月4日。

遠藤利彦 招待講演: アタッチメントと子どもの社会性の発達。東村山市保育研修講演会(東村山市中央公民館)。2015年12月9日。

遠藤利彦 招待講演: 発達臨床的視座から見るアタッチメント。静岡県臨床心理士研修講演会(静岡パルシェ会議室)。2015年12月13日。

遠藤利彦 招待講演: 乳幼児の心の発達と保育者の役割。坂戸市保育士研修講演会(坂戸市入西地域交流センター)。2015年12月15日。

遠藤利彦 招待講演: 思春期発達基盤としてのアタッチメント。平成27年度横浜市児童相談所係別研修講演会(横浜中央児童相談所)。2016年1月15日。

遠藤利彦 招待講演: 最新の研究から学ぶ新しい赤ちゃん像と保育実践。第41回保育総合研修会(神戸ANAクラウンプラザホテル)。2016年1月28日。

遠藤利彦 招待講演: 0才からの乳幼児期の発達のための教育とエビデンス。石川県新年号合同研修会(ANAクラウンプラザホテル金沢)。2016年1月30日。

遠藤利彦 招待講演: 愛着から学ぶ乳幼児期から思

春期の母子相談。関東地区児童家庭支援センター協議会専門研修会（千代田区星陵会館）。2016年2月19日。

遠藤利彦 招待講演：発達心理学の立場から見る乳幼児期の心の発達と保育実践。平成27年度群馬県保育教諭等研修会（群馬県生涯学習センター）。2016年2月12・26日。

岡田 猛（教授）

〈著書〉

- (1) Nomura, R. & Okada, T. (2016). Assessing the appeal power of narrative performance by using eyeblink synchronization among audience. In T. Ogata & Akimoto, T. (Eds.), *Computational and Cognitive Approaches to Narratology, Edition: 1*, IGI Global.
- (2) 岡田猛 (2016). 序：描くということ 小澤基弘（編）越境する表現：さまざまな場でのドローイング実践とその効果 6-11, あいり出版

〈雑誌論文〉

- (1) 横地早和子・八桁健・小澤基弘・岡田猛 (2016). 教員養成学部の絵画教育における省察的実践についての研究Ⅳ：他者評定及び授業プロトコル分析による授業実践の効果の検討, *美術教育学研究*, 48, 409-416.
- (2) 石黒千晶・八桁健・小澤基弘・岡田猛 (2016). 総合大学における省察的芸術表現教育実践：美術創作への態度や鑑賞過程に及ぼす効果に着目して, *美術教育学研究*, 48, 49-56.
- (3) 工藤彰, 岡田猛, ドミニク・チェン (2015). リアルタイムの創作情報に基づいた作家の執筆スタイルと推敲過程の分析, *認知科学*, 22, 573-590.
- (4) 中野優子・岡田猛 (2015). コンテンポラリーダンスにおける振付プロセスの解明. *舞踊学*, 38, 43-55.
- (5) Nomura, R., Liang, Y., and Okada, T. (2015). Interactions among collective spectators facilitate eyeblink synchronization. *PLoS ONE*. 10 :e0140774, doi: 10.1371/journal.pone.014774.
- (6) Nomura, R., Hino, K., Shimazu, M., Liang, Y., & Okada, T (2015). Emotionally excited eyeblink-rate variability predicts an experience of transportation into the narrative world. *Frontiers in Psychology*. doi: 10.3388/fpsyg.2015.0447.
- (7) 高木紀久子・河瀬彰宏・横地早和子・岡田猛 (2015). 現代美術家の作品コンセプト生成過程に

関するケーススタディ：インタビューデータの計量的分析に基づいて *認知科学*, 22(2), 235-253.

〈国際学会発表〉

- (1) Takagi, K., Kawase, A., Yokochi, S., & Okada, T. (2015). Formation of an art concept: A case study using quantitative analysis of a contemporary artist's interview data. *Proceedings. The 37th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, pp.2332-2337. California, U.S.A..
- (2) Nakano, Y., & Okada, T. (2015). The Process of Creating Choreography in Contemporary Dance: A Case Study of the Choreographer Kaiji Moriyama. *2015 World Dance Alliance America Conference and Festival*, Hawaii, USA.
- (3) Ishiguro, C., & Okada, T. (2015). The effects of art experience, competence, in artistic creation, and methods of appreciation on artistic inspiration. *Proceedings of 37th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, California, USA. pp. 2911
- (4) Shimizu, D., & Okada, T. (2015). Deliberate Practice Revisited: Complexity and Creativity in the Practice Process in Breakdance, *Proceedings of 37th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, California, USA. pp. 2152-2157.

〈受賞〉

- (1) 日本認知科学会 奨励論文賞（工藤彰氏との共著）

針生悦子（教授）

〈著書〉

Haryu, E. Literacy acquisition in Japanese children. In M. Minami (ed.), *Handbook of Japanese Applied Linguistics* (pp.43-64). Boston/Berlin, De Gruyter Mouton. 2016年1月。

〈学術論文〉

Kaneshige, T. & Haryu, E. Categorization and understanding of facial expressions in 4-month-old infants. *Japanese Psychological Research*, 57, 143-154. 2015年4月。

池田慎之介・針生悦子「発話からの感情推測と実行機能の関連：発達の検討」(HCS2016-64) 電子通信情報学会技術研究報告, 115(418), 31-46. 2016年1月。

金重利典・針生悦子「6か月児は笑っていた人はいい人と判断するのか：表情を用いた援助行動・妨

害行動の予測」(HCS2016-66) 電子通信情報学会技術研究報告, 115(418), 43-47. 2016年1月.

山本寿子・針生悦子「幼児の単語学習におけるアクセントパターン利用の発達過程」 認知科学, 23, 22-36. 2016年3月.

梶川祥世・針生悦子「擬音語発話音声の高さが幼児の語認知に及ぼす影響」 認知科学, 23, 37-48. 2016年3月.

池田慎之介・針生悦子「発話からの感情判断におけるレキシカルバイアス: その発達の機序をめぐって」 認知科学, 23, 49-64. 2016年3月.

浜名真以・針生悦子「15-18か月児の母親による子どもへの感情語入力」 東京大学大学院教育学研究科紀要, 55, 261-268. 2016年3月.

〈学会発表〉

Haryu, E. & Kajikawa, S. Japanese infants' use of functional morphemes in syntactic categorization of nouns and verbs: Frequently omitted noun particles versus obligatory verb suffixes. *Poster presented at the Workshop on Infant Language Development 2015*. Stockholm, Sweden. 2015年6月.

Hamana, M. & Haryu, E. Reorganizing the semantic domain of emotions in young children. *Poster presented at the 17th European Conference on Developmental Psychology*. Braga, Portugal. 2015年9月.

Jiang, L., & Haryu, E. Which construction should be used to describe the scene? –Chinese children's knowledge about SV or SVO constructions. *Poster presented at the 17th European Conference on Developmental Psychology*. Braga, Portugal. 2015年9月.

浜名真以・針生悦子「15-18か月児の母親による感情的状況に伴う感情語発話」 日本心理学会第79回大会発表論文集, p.854, 名古屋国際会議場. 2015年9月

〈その他〉

針生悦子「赤ちゃん泣きやみメロディ絵本」(監修) 東京書店. 2015年11月.

針生悦子・岡田浩之・小林哲生「特集「ことばはどのようにしてことばになるのか」の編集にあたって」 認知科学, 23, 3-7. 2016年3月.

2015/4/1-2016/3/31

植 阪 友 理 (助教)

〈査読つき学術雑誌論文〉

Dryer, R., Uesaka, Y., Manalo, E., & Tyson, G. (2015). Cross-cultural examination of beliefs about the causes of bulimia nervosa among Australian and Japanese females. *International Journal of Eating Disorders*, 48, 176-186. (査読あり)

深谷達史・福田麻莉・植阪友理 (2015) 協同場面における図の構築が統計概念の理解に及ぼす影響 教育工学会論文誌, 39, 21-24. (査読あり)

深谷達史・植阪友理・田中瑛津子・篠ヶ谷圭太・西尾信一・市川伸一 (2016) 高等学校における教えあい講座の実践—教えあいの質と学習方略に対する効果 教育心理学研究, 64, 88-84. (査読あり)

〈査読つき国際学会〉

Uesaka, Y., Suzuki, M., Wang, M., & Ichikawa, S. (2015, August). Developmental order of learning strategy use: IRT analysis of data from Japan and China. Paper presentation at 16th biennial EARLI conference for research on learning and instruction (EARLI 2015), Limassol, Cyprus (査読あり)

Manalo, E., Uesaka, Y., Sheppard, C. (2015, August). Can interactive communication promote student use of diagrams in explaining what they have learned? Paper presentation at 16th biennial EARLI conference for research on learning and instruction (EARLI 2015), Limassol, Cyprus (査読あり)

Dryer, R., Manalo, E., Uesaka, Y., & Tyson, G. (2015). Australian and Japanese female students' beliefs about the treatment of bulimia nervosa. Paper presented at the Australian Psychological Society 50th Annual Conference, September 29–October 2, Gold Coast, Queensland, Australia. (査読あり)

〈書籍 (分担執筆)〉

植阪友理 (2015) 第20章 附属学校と大学との組織的な連携関係をいかにして構築するか 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会 (編) カリキュラム・イノベーション—新しい学びの創造へ向けて— 東京大学出版会 pp.299-313.

市川伸一・植阪友理 (2015) 第7章 社会に生きる学び方とその支援 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会 (編) カリキュラム・イノベーション—新しい学びの創造へ向けて— 東京大学出版会 pp.95-104.

小玉重夫・植阪友理 (文責) (2015) 第22章 今後の

カリキュラムの方向性を探る—プロジェクトの足跡をたどって— 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会（編）カリキュラム・イノベーション—新しい学びの創造へ向けて— 東京大学出版会 pp.325-348.

〈国内学会発表〉

藤澤伸介・植阪友理・深谷達史・田中瑛津子・山田高大（2015年，8月）高校生は相手の理解状態をどう確認するか：作問課題による理解観の検討

日本教育心理学会総会発表論文集（57），612，

深谷達史・植阪友理（2015年，8月）子どものつまづきを踏まえた授業設計力測定の試み：指導案作成課題を通じた検討 日本教育心理学会総会発表論文集（57），292.

植阪友理・吉澤佳子・武田直美・高橋靖子・石井徳子・赤松百合子（2015年，9月）絵本選びの視点を育てる研修プログラムの開発の試み—「三匹の子ぶた」を素材に「教えて考えさせる授業」を援用して— 日本教育工学会第31回全国大会 電気通信大学

植阪友理・仲谷佳恵・山口一大・上西秀和・中川正宣（2015，9月）教師の実態把握を評価する新たな枠組みの提案—新たな数理モデルの開発とパラメータの意味— 日本テスト学会第13回大会における口頭発表 関西学院大学<http://www2.kansai-u.ac.jp/jart2015/files2015/ippan/A0048.pdf>（4ページ）

仲谷佳恵・山口一大・上西秀和・植阪友理・中川正宣（2015，9月）Webシステム“Wits”による教師の実態把握力の解析—算数学力・学習力診断テストCOMPASSを用いた検討— 日本テスト学会第13回大会における口頭発表 関西学院大学<http://www2.kansai-u.ac.jp/jart2015/files2015/ippan/A0051.pdf>（4ページ）

上西秀和・植阪友理・山口一大・中川正宣（2015，9月）教師の実態把握力を解析する数モデルに関する考察—KL情報量との比較を中心に— 日本テスト学会第13回大会における口頭発表 関西学院大学 <http://www2.kansai-u.ac.jp/jart2015/files2015/ippan/A0049.pdf>（4ページ）

〈シンポジウムでの口頭発表および講演〉

Uesaka, Y., & Fukaya, T. (2015, February). Learning and Instruction for Autonomous Learners: What Researchers gain from the collaboration? Invited talk at the Center for Research on Activity, Development, and Learning (CRADL), Helsinki University, Finland.

（招待講演）

植阪友理・藤澤伸介・深谷達史・山田高大・和田果樹（2015年3月）協同的な学びにおける学習方略シンポジウム「教授・学習研究への新たな挑戦：理論と実践」，東京大学.

植阪友理（2015年6月）自立した学習者の育成に向けて 神奈川県立深沢高校，6月11日（招待講演）

植阪友理（2015年6月）学習者の認知に配慮した授業設計—「困難度査定」を生かした指導とは—

岡山県倉敷市立大高小学校，6月12日（招待講演）

植阪友理（2015年6月）学力向上のために家庭でできること—心理学からの示唆— 西武学園文理小学校，6月27日（招待講演）

植阪友理（2015年6月）自立した学習者の育成を目指す「教えて考えさせる授業」—学習法改善の視点から— 広島県呉市川尻中学校（川尻地区研修会），6月29日（招待講演）

植阪友理（2015年9月）国語の「教えて考えさせる授業」—目指すべき学習者像とその手だて— 広島県呉市，9月28日（招待講演）

植阪友理（2015年10月）認知心理学からみた理解を促す指導—目指すべき学習者像とその手だて— 東京都奥多摩町立氷川小学校，10月28日（招待講演）

植阪友理（2015年11月）個別学習相談による学習者の自立支援—「学習の保健室」を目指した大学と学校の連携— 東京都品川区立第二延山小学校，11月13日（招待講演）

植阪友理（2015年11月）心理学からみた効果的な勉強法—家庭学習にとりいれたい3つのコツ— 神奈川県立光陵高校講演，東京大学，11月25日（招待講演）

〈その他の業績〉

植阪友理・大石和正（編著）（2016）『国語科における「教えて考えさせる授業」の実践：平成27年度袋井市立高南小学校の挑戦』東京大学：東京

植阪友理・マナロ エマニュエル（編著）（2015）『教授・学習研究への新たな挑戦：理論と実践—学習方略プロジェクトH26年度の研究成果—』，Working Papers, Vol. 4. 東京大学：東京

植阪友理・藤澤伸介・深谷達史・山田高大・和田果樹（2015）協同的な学びにおける学習方略 植阪友理・マナロ エマニュエル（編著）『教授・学習研究への新たな挑戦：理論と実践—学習方略プロジェクトH26年度の研究成果—』，Working Papers,

Vol. 4, 8-17.

Manalo, E., Uesaka, Y., Sheppard, C. (2015) Diagrams in learning and communication. 植阪友理・マナロ エマニュエル (編著)『教授・学習研究への新たな挑戦：理論と実践—学習方略プロジェクトH26年度の研究成果—』, Working Papers, Vol. 4, 18-24.

深谷達史・植阪友理 (2015)「学習者のつまづきを授業設計に生かす—授業設計力の試み」植阪友理・マナロ エマニュエル (編著)『教授・学習研究への新たな挑戦：理論と実践—学習方略プロジェクトH26年度の研究成果—』, Working Papers, Vol. 4, 36-43.

植阪友理 (2015) 東大教師が新入生にすすめる本 UP, No.510, 3-4. 東京大学出版会

〈受賞〉

2015年10月 テスト学会より日本テスト学会大会発表賞 (植阪友理・仲谷佳恵・山口一大・上西秀和・中川正宣「教師の実態把握力を評価する新たな枠組みの提案—新たな数理モデルの開発とパラメータの意味—」に対する受賞)

2015年 8 月 EARLI (European Association for Research on Learning and Instruction) において最優秀論文賞のファイナリストに選出 (Manalo, E., Uesaka, Y., & Sekitani, K. (2013). Using mnemonic images and explicit sound contrasting to help Japanese children learn English alphabet sounds. Journal of Applied Research in Memory and Cognition, 2, 216–221. が対象)

臨床心理学コース

高橋美保 (准教授)

〈著書〉

高橋美保 (共著). 中高生を対象としたライフキャリア教育プログラムの開発と効果研究—ライフキャリア・レジリエンスを高めるために, 東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会 (編), カリキュラム・イノベーション—新しい学びの創造へ向けて, 東京大学出版会, 2015, pp.147-161.

〈雑誌論文〉

高橋美保 (共著). 成人版ライフキャリア・レジリエンス尺度の作成, (石津和子氏・森田慎一郎氏との共著).『臨床心理学』. 15-4, 2015, pp. 507-516.

高橋美保 (単著). マインドフルネスサイレントリトリートの体験過程—臨床実践への適用可能性

の検討, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 55, 2016, pp.303-315.

高橋美保 (単著). 生物・心理・社会モデルと心理職のスキルアップ (特集シリーズ・今これからの心理職(6)これだけは知っておきたいスキルアップのための心理職スタンダード)——(スキルアップに関連する主要テーマ), 臨床心理学, 15(6), 2015. pp.746-750.

高橋美保 (単著). 産業・組織領域における心理職の現状と課題 (特集 シリーズ・今これからの心理職(3)これだけは知っておきたい産業・組織領域で働く心理職のスタンダード)——(産業・組織領域において求められる心理職の活動) 臨床心理学 15(3), 2015, pp.293-296.

高橋美保 (単著). 変動する時代に生きる人間形成をめざして, 内観療法, 21-1, 2016, pp.19-22.

高橋美保 (共著). グループホームスタッフの心理的負担感に関する検討—精神障害者支援施設におけるグループインタビューから(1)—, (馬場絢子氏との共著), 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 39, 2016, pp.82-92.

高橋美保 (共著). “福祉の地域連携から見た心理職のニーズ—精神障害者支援施設におけるグループインタビューから(2)—, 野村佳申氏・青木茂嘉氏・稻吉玲美氏・勝又結菜氏, 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 39, 2016, pp.93-101.

高橋美保 (共著). 志望度の低い就職先への進路決定者における精神的健康, (石黒香苗氏・中山奈緒子氏との共著), 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 39, 2016, pp.102-110.

高橋美保 (共著). 成人ASD者の就労に関わる支援者の困難感に関する研究—関連要因の探索的研究—, (齋藤さらさ氏・神辺明香里氏・田川薫氏との共著), 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 39, 2016, pp.111-120.

高橋美保 (共著). 発達障害のある大学生への「合理的配慮」と配慮：エビデンスに基づいた配慮を実現するために (研究委員会チュートリアルセミナー2), (高橋知音氏との共著) 日本教育心理学会総会発表論文集, 56, 2015. 20-21.

〈学会発表〉

Miho Takahashi (Poster). Asia Pacific Academy of Psychosocial Factors at Work, The implementation of mental-health care program for the unemployed: from

its development to evaluation, Seoul. 2015.

高橋美保 (口頭発表). 第6回国際内観療法学会, 内観療法の作用機序—マインドフルネスとの関係性から, 上海. 2015.

〈その他の業績〉

高橋美保 (書評). マインドフルにいきいき働くためのトレーニングマニュアル—職場のためのACT, 精神療法, 42-1, 2016, pp.114-115.

身体教育学コース

多賀 厳太郎 (教授)

〈雑誌論文〉

Y. Sato, D. Shimaoka, K. Fujimoto, G. Taga: Neural field dynamics for growing brains. *Nonlinear Theory and Its Applications*, E7-N, 2016

D. Tsuzuki, H. Watanabe, I. Dan, G. Taga: MinR 10/20 system: Quantitative and reproducible cranial landmark setting method for MRI based on the minimum initial reference points. *Journal of Neuroscience Methods* 264, 86-93, 2016

Y. Ohmura, H. Gima, H. Watanabe, G. Taga, Y. Kuniyoshi: Developmental change in intralimb coordination during spontaneous movements of human infants from 2 to 3 months of age. *Experimental Brain Research* 234, 2179-2188, 2016

〈著書〉

多賀厳太郎: 発達と保育のシステム論. 秋田喜代美 (監), 山邊昭則・多賀厳太郎 (編) あらゆる学問は保育につながる: 発達保育実践政策学の挑戦. 東京大学出版会, 165-190, 2016

〈その他〉

多賀厳太郎: 睡眠中の赤ちゃんの脳機能イメージングからわかること, 日本赤ちゃん学会第15回学術集会, かがわ国際会議場, 高松, 2015.6.28 (招待)

多賀厳太郎: 脳血液動態の位相が意味するもの, 日本光脳機能イメージング学会第18回学術集会, 星陵会館, 東京, 2015.7.25 (大会長講演)

多賀厳太郎: 乳児における脳と身体の自発活動, 胎児新生児神経研究会, 名古屋大学, 名古屋2015.8.29 (招待)

Gentaro Taga: Spontaneous dynamics in development of brain and behavior in young infants, RIKEN BSI, 和光, 2015.9.14 (招待)

Gentaro Taga: Phase dynamics of spontaneous activity in the cerebrovascular system of human infants, 研究

集会「実用逆問題の背景にある数理と新展開」九州大学, 伊都, 2015.11.15 (招待)

野崎 大地 (教授)

〈雑誌論文〉

1. Hayashi T, Yokoi A, Hirashima M, Nozaki D. Visuomotor map determines how visually guided reaching movements are corrected.

Translational and Computational Motor Control (TCMC). 2015.

〈<http://eneuro.org/content/early/2016/05/22/ENEURO.0032-16.2016>〉

2. Takiyama K, Hirashima M, Nozaki D. Prospective errors determine motor learning. *Nature Communications*, 6: 5925, 2015.

〈<http://www.nature.com/ncomms/2015/150130/ncomms6925/full/ncomms6925.html>〉

3. Kasuga S, Telgen S, Ushiba J, Nozaki D, Diedrichsen J. Learning feedback and feedforward control in a mirror-reversed visual environment.

Journal of Neurophysiology, 114(4): 2187-93, 2015

〈<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/26245313>〉

〈国際会議〉

1. Hayashi T, Yokoi A, Hirashima M, Nozaki D. Visuomotor map determines how visually guided reaching movements are corrected.

Translational and Computational Motor Control (TCMC). Chicago, USA. 11/2015.

2. Hayashi T, Yokoi A, Hirashima M, and Nozaki D. Gain alteration of feedback control and adaptation induced by acquisition of a novel visuomotor map of reaching movements. *Society for Neuroscience*, Chicago, USA, October 17-21, 2015.

3. Hayashi T, Yokoi A, Hirashima M, and Nozaki D. Acquisition of a novel visuomotor map alters online movement correction and trial-by-trial adaptation.

Society for the Neural Control of Movement. Charleston, South Carolina, USA, April 19-24, 2015.

4. Atsushi Takagi, Hirashima Masaya, Daichi Nozaki, Etienne Burde. Effect of Multi-Human Interaction on Motor Performance.

Society for the Neural Control of Movement. Charleston, South Carolina, USA, April 19-24, 2015.

5. Akikazu Sasaki, Daichi Nozaki, Decomposing motor memory decay into trial-and time-dependent

components.

Society for Neuroscience, Chicago, USA, 2015

〈国内会議〉

1. Hayashi T, Yokoi A, Hirashima M, Nozaki D. Acquisition of a novel visuomotor map Systems Neuroscience and Rehabilitation. 国立リハビリテーションセンター. 3/2015.
2. Hayashi T, Nozaki D. Motor learning benefited from increasing training contexts: Bimanual training enhances unimanual performance. 日本神経科学大会. 神戸国際会議場. 7/2015.
3. 林拓志, 横井惇, 平島雅也, 野崎大地. 視覚運動変換写像の形状が動作修正を決める. Motor Control 研究会. 京都大学. 6/2015.
4. 佐々木彰一, 野崎大地. 運動記憶の形成・忘却の時間依存的パターン. Motor Control 研究会. 京都大学. 6/2015

〈講演〉

1. Daichi Nozaki. Context-dependent Human Motor Memories: Function, Implementation, and Manipulation. 5th International Conference on Cognitive Neurodynamics, Sanya, China, 2015.
2. 野崎大地. 運動制御・学習理論の基礎 第8回運動神経化学研究会, 福岡, 2015

山本義春(教授)

〈論文〉

- Fukuda, M., Y. Ogiyama, R. Sato, T. Miura, H. Fukuta, M. Mizuno, K. Kiyono, Y. Yamamoto, J. Hayano, and N. Ohte. L/T-type calcium channel blocker reduces non-Gaussianity of heart rate variability in chronic kidney disease patients under preceding treatment with ARB. *Journal of the Renin-Angiotensin-Aldosterone System* 17: 1470320316643905: 1–9, 2016.
- Kim, J., T. Nakamura, and Y. Yamamoto. A momentary biomarker for depressive mood. *In Silico Pharmacology* 4: 4-1–6, 2016.
- Nakamura, T., K. Kiyono, H. Wendt, P. Abry, and Y. Yamamoto. Multiscale analysis of intensive longitudinal biomedical signals and its clinical applications. *Proceedings of the IEEE* 104: 242–261, 2016.
- Watanabe, E., K. Kiyono, J. Hayano, Y. Yamamoto, J. Inamasu, M. Yamamoto, T. Ichikawa, Y. Sobue, M.

Harada, and Y. Ozaki. Multiscale entropy of the heart rate variability for the prediction of an ischemic stroke in patients with permanent atrial fibrillation. *PLoS ONE* 10: e0137144-1–13, 2015.

Sassi, R., S. Cerutti, F. Lombardi, M. Malik, H. V. Huikuri, C. -K. Peng, G. Schmidt, and Y. Yamamoto. Advances in HRV signal analysis: joint position statement by the e-Cardiology ESC Working Group and the European Heart Rhythm Association. *Europace* 17: 1341–1353, 2015.

Kikuchi, H., K. Yoshiuchi, T. Ando, and Y. Yamamoto. Influence of psychological factors on acute exacerbation of tension-type headache: investigation by ecological momentary assessment. *Journal of Psychosomatic Research* 79: 239–242, 2015.

Kim, J., T. Nakamura, H. Kikuchi, K. Yoshiuchi, T. Sasaki, and Y. Yamamoto. Covariation of depressive mood and spontaneous physical activity in major depressive disorder: towards continuous monitoring of depressive mood. *IEEE Journal of Biomedical and Health Informatics* 19: 1347–1355, 2015.

Kim, J., T. Nakamura, H. Kikuchi, and Y. Yamamoto. Psychobehavioral validity of self-reported symptoms based on spontaneous physical activity. In: *Proceedings of 37th Annual International Conference of IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (EMBC 2015)*, pp. 4021–4024, 2015.

Valenza, G., H. Wendt, K. Kiyono, J. Hayano, E. Watanabe, Y. Yamamoto, P. Abry, and R. Barbieri. Point-process high-resolution representations of heartbeat dynamics for multiscale analysis: a CHF survivor prediction study. In: *Proceedings of 37th Annual International Conference of IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (EMBC 2015)*, pp. 1951–1954, 2015.

〈招待講演〉

Yamamoto, Y. Multiscale analysis of intensive longitudinal biomedical signals and its clinical applications (plenary). *Gretsi2015*. ENS Lyon, Lyon, France (September, 2015).

東郷史治(准教授)

〈雑誌論文〉

Togo, F. (共著), 「Annual longitudinal survey at up to five time points reveals reciprocal effects of bedtime

delay and depression/anxiety in adolescents」, (M. Tochigi, S. Usami, M. Matamura, Y. Kitagawa, M. Fukushima, H. Yonehara, A. Nishida, T. Sasaki氏との共著), 『Sleep Medicine』第17, 2016, p.81-86.

Togo, F. (共著), 「Effect of milnacipran treatment on ventricular lactate in fibromyalgia: A randomized, double-blind, placebo-controlled trial」, (B.H. Natelson, D. Vu, X. Mao, N. Weiduschat, G. Lange, M. Blate, G. Kang, J.D. Coplan, D.C. Shungu氏との共著), 『The Journal of Pain』第16, 2015, p.1211-1219.

Togo, F. (共著), 「Effects of school-based mental health literacy education for secondary school students: a preliminary study」, (Y. Ojio, H. Yonehara, S. Taneichi, S. Yamasaki, S. Ando, F. Togo, A. Nishida, T. Sasaki氏との共著), 『Psychiatry Clinical Neuroscience』第69, 2015, p.572-579.

Togo, F. (共著), 「Cortisol level measurements in fingernails as a retrospective index of hormone production」, (S. Izawa, K. Miki, M. Tsuchiya, T. Mitani, T. Midorikawa, T. Fuchu, T. Komatsu氏との共著), 『Psychoneuroendocrinology』第54, 2015, p.24-30.

東郷史治 (共著), 「認知症専用棟で交代勤務に従事する介護労働者における表情認知」, (久保智英, 津野香奈美, 高橋正也, 一水卓, 佐藤悦子, 菊池沙織, 三谷健, 小松泰喜氏との共著), 『産業ストレス研究』第22巻, 2015, p.119-126.

森 田 賢 治 (准教授)

〈著書〉

なし

〈雑誌論文〉

Kenji Morita & Yasuo Kawaguchi. Computing reward-prediction error: an integrated account of cortical timing and basal-ganglia pathways for appetitive and aversive learning. *European Journal of Neuroscience* 42(4):2003-21. (2015).

〈学会発表〉

Ayaka Kato & Kenji Morita. Potential mechanistic account for the suggested relationship between the ramping dopamine signal and sustained motivational drive: a study of reinforcement learning model. *Bernstein Conference 2015* doi: 10.12751/nnn.bc2015.0095 (2015).

Masashi Kondo, Mieko Morishima, Yasuo Kawaguchi, & Kenji Morita. Multi-compartmental models of corticopontine and crossed-corticostriatal neurons of Rat frontal cortex. *Bernstein Conference 2015* doi: 10.12751/nnn.bc2015.0166 (2015).

岸 哲 史 (助教)

〈雑誌論文〉

・Varga, A. W., E. L. Ducca, A. Kishi, E. Fischer, A. Parekh, V. Koushyk, P. L. Yau, T. Gumb, D. P. Leibert, M. E. Wohlleber, O. E. Burschtin, A. Convit, D. M. Rapoport, R. S. Osorio, I. Ayappa. Effects of aging on slow wave sleep dynamics and human spatial navigational memory consolidation. *Neurobiology of Aging*, 42:142-149, 2016.

〈招待講演・シンポジウム〉

・岸哲史. ヒト睡眠段階遷移のダイナミクス. 日本睡眠学会第40回定期学術集会・シンポジウム「次世代の睡眠の基礎研究」, 栃木 (2015年7月).

教職開発コース

秋 田 喜代美 (教授)

〈著書〉

秋田喜代美・神長美津子 (監修・編著) 『科学する心を育む保育 園内研修に生かせる実践・記録・共有アイデア』学研 pp.95. 2016

秋田喜代美 (監修) 山邊昭則・多賀巖太郎 (編) 『あらゆる学問は保育につながる: 発達保育実践政策学の挑戦』東京大学出版会PP.393. 「いま「保育」を考えるために」 pp.1-14. 「現代日本の保育: 人が育つ場としての保育」 pp.17-44. 「座談会 発達保育実践政策学の構築にむけて」 (秋田喜代美・遠藤利彦・大桃敏行・佐倉統・多賀巖太郎・村上裕介・山邊昭則・渡邊はま) pp.275-334.

秋田喜代美 「本研究の問題と目的」 pp.8-16. 「全体考察」 pp.183-193 (財) 野間教育研究所幼児教育部会 (著) (秋田喜代美・安見克夫・増田時枝・中坪史典・砂上史子・箕輪潤子) 『園における知の創出と共有』野間教育研究所紀要56集, 2015.

秋田喜代美 「言語力としてのメタ文法能力の育成」 東京大学教育学部カリキュラムイノベーション研究会 (編) 『カリキュラムイノベーション: 新しい学びの創造へむけて』東京大学出版会 pp.53-64. 2015

秋田 喜代美・無藤隆 「対談 教育と保育」 無藤隆

(編著)『よくわかる！教育・保育ハンドブック
保育の質をあげる10のポイント』フレーベル館
pp102-113. 2015.

(翻訳書)

イラム・シラージ, デニス・キングストン, エド
ワードメルウィッシュ(著) 秋田喜代美・淀川
裕美(訳)『「保育プロセスの質」評価スケール:
乳幼児期の「ともに考え、深め続けること」と「情
緒的な安定・安心」を捉えるために』明石書店
2016 pp.117.

(企画・監修)

秋田喜代美(監修) 稲葉茂勝著『本屋って何?』ミ
ネルヴ書房 pp1128.2015.

秋田喜代美(監修) 稲葉茂勝著『ケイタイ マナー
違反していない? (みんなで考えよう! つかう・
つかわない? どうつかう? 1)』フレーベル館
pp31. 2015

秋田喜代美(監修) 稲葉茂勝著『ケスマフォー便利
さにたよりすぎていない? (みんなで考えよう!
つかう・つかわない? どうつかう? 2)』フレー
ベル館 pp31. 2015

秋田喜代美(監修) 稲葉茂勝著『SNS—本当につな
がっている? (みんなで考えよう! つかう・つ
かわない? どうつかう? 3)』 フレーベル館
pp.31 2016

〈論文〉

(学術論文)

秋田喜代美・宮田まり子・佐川早季子・呂小耘・杉
本他屋代・辻谷真知子・遠山雄一郎・宮本雄太「小
学生の遊び観の分析: 遊びに対するイメージと価
値認識に着目して」東京大学大学院教育学研究科
紀要, 55, 325-346. 2016

棕田善之・秋田喜代美「園内研究協議会の工夫と困
難に関する調査検討—研究協議の頻度に着目し
て」国際幼児教育学研究22, 25-38. 2016

佐川早季子・秋田喜代美「幼稚園4歳児クラスの政
策場面における幼児がモノを見せる行為の機能の
検討—受け手の幼児の応答が(見せた)側の幼児
の製作過程に与える影響に着目して」国際幼児教
育学研究23, 43-56. 2016

笹屋孝允・森脇健夫・秋田喜代美. 「小学校教師の
学級経営感と授業実践の関係の検討—学年共同の
研究授業における3学級同一内容の説明文授業の
比較」三重大学教育学部研究紀要(教育科学67,
375-388. 2016

秋田喜代美「保幼小の連携接続への展望: 小学校教
師の1日保育士体験事例の検討」(財)日本教材
文化研究財団研究紀要, 45, 6-11.

(一般雑誌論文)

秋田喜代美「発達面から見る幼保小の連携と接続」
日本教育, 446, 6-9. 2015

秋田喜代美「体育における「学びの共同体」の実践
と探究」英語教育, 64 (4), 92. 2015

秋田喜代美「校内研修をどうアクティブ化するか」
教職研修, 44 (2) 28-29. 2015.

秋田喜代美「これからの読書指導の推進と学校図書
館の活用に関する方向性」中等教育資料954, 14-
19 2015.

秋田喜代美「格差・落差・段差なく子どもと本をつ
なぐ場所へ」学校運営, 57 (2), P6-9.

秋田喜代美「資質・能力 教室の窓」47, 18-
19. 2016.

秋田喜代美「書評(イギリスの教育の未来を拓く小
学校: 限界なき学びの創造プロジェクト) 英語教
育」64 (12), 94. 2015.

秋田喜代美「1, 2年生の家庭教育に求められるも
の」児童心理, 1021, 1-10. 2016

秋田喜代美「保育・教育の質と子どもの発達」子ど
も学, 18, 69-93. 2016.

〈学会発表〉

(招待講演および国際学会発表)

Akita, K. Building up sustainable learning communities
The 3rd International Conference for School as
Learning Communities. Tokyo: Gakusyuin University,
2015.8.8 (基調講演)

Akita, K. Theorizing Lesson Studies: Comments
on Lewis and Xainming, the WALs in Khon Ken
University. 2015.11, 23 (Plenary Symposium)

Akita, K. An Analysis of Variations in Lesson Planning
Sheets in Japan. Paper Presented at the WALs in Khon
Ken University. 2015.11, 24

Akita, K. How Japanese educators reflect on the
environment using photograph? EECERA 25th at the
Universitat Autònoma de Barcelona P124 2015. 9.

Miyata, M. Ikeda, Shinnosuke, Sagawa, S. Sugimoto, T.
Toyma, Y. Tsujitani, M. Lu, Siayun, Akita, K. Miyamoto,
Yuta. Children's value of play EECERA 25th at the
Universitat Autònoma de Barcelona P170 2015.9.9

Akita, K. 2015 Photo Evaluation method: Reflecting on
environments using photographs to improve quality in

- Japan The Inaugural Early starc conference University of Wollongong Australia. P55. 2015. 28-30.
- Onoda, R., Miwa, A., & Akita, K. "Highlighting Effect: The Function of Rebuttals in Written Argument" Proceedings of the Euro Asian Pacific Joint Conference on Cognitive Science. 2015, 1, 175-180.
- (国内学会発表)
- 秋田喜代美「保育環境写真（PEMQ）による保育者の環境への取り組みの変化」日本保育学会大会発表論文集, 2015.
- 箕輪潤子・秋田喜代美・安見克夫・増田時枝・中坪史典・砂上史子「4歳児の片付け場面における保育者の援助—園における片付けの実態の違いに着目して—」日本教育心理学会総会論文集 2015
- 上田敏丈・秋田喜代美・無藤隆・小田豊・箕輪潤子・野口隆子・芦田宏・鈴木正敏・中坪史典・門田理世・森暢子「4歳から小2までの科学的思考の発達に関する縦断的研究—リーズン」の質に着目して」日本乳幼児教育学会第25回大会研究発表論文集 p.24-25, 2015.
- 中坪史典・箕輪潤子・秋田喜代美・砂上史子・安見克夫・増田時枝「場面想定法を用いた保育者の片付け方略の検討（1）ボク（私）使ってないもん」への対応（2）」日本乳幼児教育学会第25回大会研究発表論文集 p316-319. 2015
- (報告書)
- 秋田喜代美（代表）報告書「保育教育の質が幼児・児童の発達に与える影響の検討」（課題番号 23243079）平成23年度—27年度科学研究費補助金【基盤研究A】 pp.123
- ベネッセ教育総合研究所「幼児期から小学1年生の家庭教育調査 縦断調査」（無藤隆・秋田喜代美・荒牧美佐子・都村聞人他4名）2016. pp. 24.
- 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「高校生活と進路に関する調査 ダイジェスト版」（石田浩・耳塚寛明・秋田喜代美・松下佳代・佐藤香 他11名）2015. pp. 19.
- 東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2015」（石田浩・耳塚寛明・秋田喜代美・松下佳代・佐藤香 他11名）2016
- (執筆協力者)
- OECD (Ed.) Starting Strong IV: Monitoring Quality in Early Childhood Education and Care. 2015. 10

浅井 幸子（准教授）

〈著書〉

- 秋田喜代美・佐藤学編『新しい時代の教職入門（改訂版）』有斐閣, 2015年8月。（第9章「教師の仕事とジェンダー」201-226頁。）

〈論文〉

- 浅井幸子「子どもの生活と集団」太田素子・福元真由美・浅井幸子・大西公恵『戦後幼児教育・保育実践記録集 第Ⅱ期 子どもの生活と仲間関係解説』日本図書センター, 2015年5月。
- 浅井幸子「構造化されたカリキュラム」太田素子・福元真由美・浅井幸子・大西公恵『戦後幼児教育・保育実践記録集 第Ⅲ期 保育のデザイン解説』日本図書センター, 2015年10月。

藤江 康彦（准教授）

〈著書〉

- 藤江康彦（単著）, 「小学校社会科における学習環境としての教室談話」, 森敏昭監修, 藤江康彦・白川佳子・清水益治編著『21世紀の学びを創る：学習開発学の展開』, 2015, pp.102-110, 総頁数272.
- 藤江康彦（単著）, 「教師の学習の契機としての小中一貫教育」, 森敏昭監修, 藤江康彦・白川佳子・清水益治編著『21世紀の学びを創る：学習開発学の展開』, 2015, pp.210-218, 総頁数272.
- 藤江康彦（単著）, 「教育実践の質的研究の動向」, 日本教育方法学会編『教育方法44教育のグローバル化と道徳の「特別の教科」化』, 図書文化, 2015, pp.134-145.
- 藤江康彦（単著）, 「授業をつくる」, 秋田喜代美・佐藤学編著『改訂版 新しい時代の教職入門』, 有斐閣, 2015, pp.21-47.

〈学会発表〉

- 藤江康彦（共著）, 「教師の学習の契機としての校種間連携（3）：新任教師の語りにみる自己・文化・制度の輻輳」（石島照代・柿原賢二・楠見友輔・遠山裕一郎・安江紗那子との連名）, 『日本教育心理学会第57回総会発表論文集』, 2015, p.655, 2015年8月28日（於：朱鷺メッセ, 新潟市）
- 藤江康彦（共著：第二著者）, 「教師の学習の契機としての校種間連携（4）：アイデンティティと成員性の獲得を促す「小中ブリッジ」（石島照代・柿原賢二・楠見友輔・遠山裕一郎・安江紗那子との連名）, 『日本教育心理学会第57回総会発表論文集』, 2015, p.656, 2015年8月28日（於：朱鷺メッセ）

セ, 新潟市)

藤江康彦 (単著), 「教師の学習の契機としての小中一貫教育: 開校から3年間の教師の語りを通して」, 『日本教育方法学会第51回大会発表要旨』, 2015, 2015年10月10日 (於: 岩手大学)

〈講演等〉

藤江康彦 (指定討論), 「授業研究の学際的解釈と再構築: 教師・児童生徒間の相互作用を中心に」 (話題提供者: 野中陽一郎・幸坂健太郎・國崎大恩・有馬道久), 『日本教育心理学会第57回総会発表論文集』, 2015, Pp.82-83, 2015年8月27日 (於: 朱鷺メッセ, 新潟市)

藤江康彦 (招待講演), 「教室にやってきた21世紀: コンピテンシー・ベースの学力観に基づく学校教育」, 『神奈川県看護教育フォーラム2016』, 2016年3月12日 (於: 藤沢市民会館)

村瀬公胤 (特任研究員)

〈国際学会誌論文〉

Murase, M. (2015). Variation of networks for professional development of teachers: A case study in Japan. *Pedagogical Dialogue* («Педагогический диалог», «Педагогикалык диалог»), 3(13), 46-49.

Saito, E., Watanabe, M., Gillies, R., Someya, I., Nagashima, T., Sato, M., & Murase, M. (2015). School reform for positive behaviour support through collaborative learning: Utilising lesson study for a learning community. *Cambridge Journal of Education*, 45(4), 489-518.

〈学術論文・査読なし〉

小柴孝子・武田明典・村瀬公胤「新教員免許状更新講習 (選択必修領域) についてのニーズ調査」『神田外語大学紀要』, 第27号, 171-191. 2016.

〈国際学会発表〉

Suratno, T. & Murase, M. (2015 November). Collaboration, collegiality and teacher development: A narrative inquiry into lesson study practices in Indonesia. World Association of Lesson Studies International Conference 2015. Khon Kaen, Thailand.

〈学会発表〉

岸本琴恵・村瀬公胤「学び合う学習環境の調査(2): 算数授業改善による小学校中学年児童の適応度の変化」日本教育心理学会第57回総会 (新潟) 2015. 8.

教育内容開発コース

藤村宣之 (教授)

〈著書〉

藤村宣之 (分担執筆), 『カリキュラム・イノベーション: 新しい学びの創造へ向けて』 (東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会編), 東京大学出版会, 2015, 65-75頁 (「リテラシーをどう育むか: 日本の子どもの数学的リテラシーの現状を手がかりに」を単独執筆).

藤村宣之 (分担執筆), 『教育認知心理学の展望』 (子安増生・楠見孝・齊藤智・野村理朗編), ナカニシヤ出版, 2016, 187-207頁 (「学校教育の展開と認知心理学の発展」を単独執筆).

〈学会発表 (招待講演)〉

藤村宣之, 「子どもの思考の多様性を生かす教科学習一学びの質を高める授業のデザイン」 東海心理学会第64回大会 大会講演, 2015年6月6日, 名城大学

藤村宣之, 「個の学びの質を高める授業づくりー協同的探究学習による「わかる学力」の形成ー」日本協同教育学会第12回大会 記念講演, 2015年10月17日, 久留米大学

北村友人 (准教授)

〈著書〉

北村友人 (単著), 『国際教育開発の研究射程ー「持続可能な社会」の実現へ向けた比較教育学の最前線ー』 東信堂, 2015, 総頁数226.

Yuto Kitamura (共編著), *The Political Economy of Schooling in Cambodia: Issues of Quality and Equity*, New York: Palgrave Macmillan, 2015, 245p.

〈雑誌論文〉

北村友人 (単著), 「グローバル・シティズンシップをめぐる議論の潮流」『異文化間教育』第42号, 異文化間教育学会, 2015年8月, 1-14頁.

北村友人 (単著), 「幼児の多文化理解を促す指導の在り方」『初等教育資料』No.929, 文部科学省教育課程課/幼児教育課, 2015年8月, 86-89頁.

北村友人 (単著), 「アジアにおける教育の『国際化』と英語」『英語教育』第64巻, 第8号, 大修館書店, 2015年10月, 64-67頁.

北村友人 (単著), 「高等教育の国際化と域内連携」『IDE 現代の高等教育』No.577, 2016年1月, 48-53頁.

学校開発政策コース

大 桃 敏 行 (教授)

〈著書〉

【分担執筆】

大桃敏行「事務局」「指導主事その他の職員」「事務局職員の定数」「事務局職員の身分取扱」荒牧重人・小川正人・窪田眞二・西原博史編『新基本法コンメンタール 教育関係法』日本評論社, 2015年9月, 227-230頁。

大桃敏行「地方発のカリキュラム改革の可能性と課題」東京大学教育学部カリキュラム・イノベーション研究会編『カリキュラム・イノベーション—新しい学びの創造に向けて—』東京大学出版会, 2015年10月, 265-276頁。

大桃敏行「公共政策の対象としての就学前の教育と保育」秋田喜代美監修, 山邊昭則・多賀巖太郎編『あらゆる学問は保育につながる—発達保育実践政策学の挑戦—』東京大学出版会, 2016年3月, 45-69頁。

〈雑誌論文, 翻訳, その他〉

大桃敏行 (単著)「教育史研究と現代教育政策分析の視点」教育史学会『日本の教育史学』第58集, 2015年10月, 110-115頁。

大桃敏行・吉良直・堀ひかり・宮口誠矢・金子友紀 (共著)「公立学校の多様化とアカウンタビリティ政策の展開—ワシントンD.C.を事例として—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第55巻, 2016年3月, 425-443頁。

大桃敏行 (単著)「ガバナンス改革と教育の質保証」大桃敏行 (研究代表者)『ガバナンス改革と教育の質保証に関する理論的実証的研究』(科学研究費補助金基盤研究(A)平成26年度報告書) 2015年5月, 9-18頁。

セオドア・R・ミッチェル (大桃敏行訳)「教育／北アメリカ」『スクリプナー思想史大事典』第2巻, 丸善出版, 2016年1月, 674-676頁。

東京大学出版会『UP』編集部『東大教師が新入生にすすめる本 2009-2015』東京大学出版会, 2016年3月, 195-196頁。

〈学会等発表〉

大桃敏行「教育の公正と質保証」日本学術会議心理学・教育学委員会公正原理を重視する公教育システムの再構築分科会, 日本学術会議, 2015年7月31日。

大桃敏行「指定討論」ラウンドテーブル「教育の平

等保障と国家の責任—米国初等中等教育法の50年を問う—」日本教育学会第74回大会, お茶の水女子大学, 2015年8月28日。

吉良直・金子友紀・宮口誠矢・堀ひかり・大桃敏行「公立学校の多様化とアカウンタビリティ政策の展開—ワシントンD.C.を事例として—」日本教育行政学会第50回大会, 名古屋大学, 2015年10月10日。

勝 野 正 章 (教授)

〈著書〉

(共著)

小川正人・勝野正章『改訂版 教育行政と学校経営』放送大学教育振興会, 2016年3月, 291p.

Joint ILO/UNESCO Committee of Experts on the Application of the Recommendations concerning Teaching Personnel. (2015). *Final Report Twelfth Session 2015, Paris, 20-24 April 2015*, Geneva: ILO. 31p. (委員による共同執筆)

(共編著)

市川須美子・小野田正利・勝野正章・窪田眞二・中嶋哲彦・成嶋隆『教育小六法 平成28年度版』学陽書房, 1374p.

(分担執筆)

勝野正章「地方教育行政の組織及び運営に関する法律, 第4章 教育機関, 第1節 通則第30条~36条」(pp.245-251), 「同章 第2節 市町村立学校の職員 第45条~第46条」(pp.265-269), 荒牧重人・小川正人・窪田眞二・西原博史編『別冊法学セミナー No. 237 新基本法コンメンタール 教育関係法』日本評論社, 2015年9月, 473p.

勝野正章「学力と教育課程」(pp.232-233), 「教職員評価問題」(pp.266-267)

姉崎洋一・荒牧重人・小川正人・金子征史・喜多明人・戸波江二・廣澤明・吉岡直子編『新訂版 ガイドブック教育法』三省堂, 2015年12月, 307p.

勝野正章「第2章 公教育制度の成立と近代公教育思想の展開 1 イギリス公教育制度の成立と教育思想」pp.9-15, 「第3章 各国における教育改革運動の展開 2 イギリス」(pp.71-79) 斎藤利彦・佐藤学編著『新版 近現代教育史』学文社, 2016年3月, 183p.

〈雑誌論文〉

勝野正章「教育条件整備の課題—特に教師の地位と労働条件について」障害者問題研究, 第43巻, 第

1号, 2015年5月, pp.10-17

勝野正章「学校評価の有効性を高めるにはどうすればよいか」『中学校』(全日本中学校長会) 2015年6月号, No.741, pp.8-11

勝野正章「教育の『質保証』と教育行政の中立性」教育, 2015年9月号 (No.836), pp.32-39

勝野正章「なぜ, 教員の『学びあい』なのか」埼玉教育 (埼玉県総合教育センター), No.775 (平成27年9月), pp.4-5

〈学会発表〉

村上純一・町支大祐・藤井幹夫・盛藤陽子・福島真治・勝野正章「高校における教員の学び合い」日本教育経営学会第55回大会, 2015年6月21日, 東京大学

勝野正章「自治体教育政策が教育実践に及ぼす影響—授業スタンダードを事例として」日本教育政策学会第22回大会課題研究 自治体教育政策における構造改革と教育的価値の実現, 2015年7月5日, 福島大学

Katsuno, M. "Impact of Teacher Evaluation on School Leadership: Japanese Case." Graduate School of Education, 2016年3月11, University of Oslo.

村上 祐 介 (准教授)

〈著書〉

坪井由実・渡部昭男編著, 日本教育行政学会推進委員会企画『地方教育行政法の改定と教育ガバナンス—教育委員会制度のあり方と「共同統治」』, 三学出版, 2015 (第1章「教育委員会改革の制度設計をめぐる経緯と論点」, pp.2-15を分担執筆)

荒牧重人・小川正人・窪田眞二・西原博史編『新基本法コンメンタール 教育関係法 (別冊法学セミナー)』, 日本評論社, 2015 (地教行法第21~29条, pp.231-244を分担執筆)

秋田喜代美監修, 山邊昭則・多賀巖太郎編『あらゆる学問は保育につながる: 発達保育実践政策学の挑戦』東京大学出版会, 2016 (第3章「保育の制度・政策研究をめぐる諸課題」, pp.71-95を分担執筆)

〈雑誌論文〉

村上祐介 (単著), 「教育委員会制度改革と教育行政の専門性」『日本教育行政学会年報』第41号, 2015, pp.70-86.

村上祐介 (単著), 「教育委員会改革と政治的中立性」『Voters』第26号, 2015, pp.14-15.

〈その他〉

村上祐介 (単著), 「公開シンポジウム『公共政策としての教育政策』のまとめ: 可能性と課題」『日本教育政策学会年報』第22号, 2015, pp.87-90.

村上祐介 (単著), 「『エビデンスに基づく政策形成』の陥穽」, 『週刊教育資料』2016年2月8日号, p.38.

村上祐介 (単著), 「教育時事キーワード解説 (連載)」, 『教職研修』2013年4月号~ (連載中)

〈学会発表〉

Yusuke Murakami, Institutional Reform on Board of Education in Japan, 2015 KAPA (Korean Association for Public Administration) International Conference, at Sangmyoung University. Cheonan Campus, Korea, 2015年7月17日

村上祐介, 「パネル討論・保育の質を高めるために (教育政策研究の視点から)」 発達保育実践政策学センター設立記念国際シンポジウム, 2015年8月22日

村上祐介, 「教育行政学は政治をどう分析してきたのか」日本教育社会学会第67回大会 (駒澤大学), 2015年9月10日

村上祐介, 「政策研究からみた保育」日本心理学会公募シンポジウム「発達保育実践政策学の挑戦: あらゆる学問は保育につながる」(名古屋国際会議場), 2015年9月24日

発達保育実践政策学センター

野 澤 祥 子 (准教授)

〈雑誌論文〉

野澤祥子・網野武博・上村康子・尾木まり・大方美香・福川須美「家庭訪問保育・事業所内保育の利用者の意識とニーズ」日本保育学会第68回大会発表抄録集, 発表ID915, 2015

〈その他〉

野澤祥子・猿渡知子・水枝谷奈央「居宅訪問型産前・産後支援の現状と課題」平成27年度AMINO基金報告書